The Japan Lung Cancer Society

院中である．

12．^{67}Ga シンチグラフィを契機に肺癌合併が発見された症例の検討

長崎大放射線科
芦澤和人，木下博史，内田孝俊
中原信哉，小川洋二，林　邦昭

悪性腫瘍合併の検索を目的として，過去4年間に^{67}Ga シンチグラフィが施行された34例を検討した．胸部に集積のみられた10例(29%)中3例に肺癌が存在し，うち2例は，胸部単純写真での指摘が困難であった．肺癌は，2例が右肺門に1例が心陰影に重なって存在し，胸部単純写真読影上の pitfall であった．^{67}Ga シンチグラフィは悪性腫瘍，特に肺癌合併のスクリーニング検査として有用と思われた．

13．原発性肺癌における CA 19-9 の臨床病理学的意義－腺癌を中心に－

久留米大第1内科　　木下正治
力丸　徹，田中泰之
市川洋一郎，大泉耕太郎

原発性肺癌40症例の血清 CA 19-9値は25%に陽性を示し，特に腺癌は他組織型に比し有意に高く，分化度が高いほどまた臨床病期の進行とともに高値を示す傾向があった．腺癌の生検組織に免疫組織染色が施され，血清 CA 19-9 陽性例全てに陽性所見を認めた．

14．肺腺癌における TGF-β の発現とその悪性度の解析

九州大第2外科
井上　隆，犬塚貞明，井上啓爾
杉尾賢二，石田照佳，杉町圭蔵

肺腺癌124例における TGF-β の発現を免疫組織化学的に検討した．陽性細胞が25未満を低値群，25% 以上を高値群とした．臨床病理学的因子では分化度で有意差が認められた．予後は完全切除症例，非完全切除症例のいずれでも高値群の方が低値群より良好であった．多変量解析でも TGF-β の発現は重要な予後規定因子の一つであった．TGF-β の発現の高い症例は予後良好であり，腫瘍の増殖抑制に関与していると考えられた．

15．肺癌における nm23 発現の検討

長崎市立市民病院内科
木下明敏，中野正心
長崎大第2内科　　広瀬清人
早田　宏，岡三喜男，原　耕平
同　腫瘍医学　　珠玖　洋

nm23 の発現を，外科的に切除された肺癌62症例について，Northern hybridization 法により求めた各肺癌症例の nm23 発現量と，性，組織型，分化度，pTNM 因子，血清CEA，腫瘍径などとの相関について統計学的に解析した．また肺癌原発巣および転移リンパ節の免疫組織染色も行った．結果は，nm23 発現量と pT 因子，腫瘍径とに相関関係が認められたが，pN 因子との相関はなかった．また免疫染色の染色性と nm23 発現量とは，関連がなかった．

16．異時性の肺重複癌においていずれも ras 遺伝子の変異が認められた1例

九州大第2外科
杉尾賢二，井上　隆，井上啓爾
石田照佳，杉町圭蔵

症例は67歳の男性で，右肺癌で右上葉切除が行われ，中分化型腺癌と診断された．術後4年目に右上肺野に浸潤影が出現し，右中下葉切除が行われ，高分化型腺癌の組織診断となったが，必ずしも転移か重複癌の判断は困難であった．本症例の遺伝子解析から，K-ras の第12コドンが第1癌では GTT に，第2癌では TGT に変異していた．遺伝子レベルから独立した癌と証明され，この変異が肺癌の発生に関与していることが示唆された．

17．ポリープ状所見を呈した肺小細胞癌の臨床的検討

久留米大第1内科　　樋口英一
木下正治，田中泰之，力丸　徹
市川洋一郎，大泉耕太郎

当科で経験した内視鏡的にポリープ状所見を呈した肺小細胞癌の9例について検討した．症例は男性7例，女性2例で平均年齢は63.2歳であった．原発巣は右肺門部が5例，左肺門部が4例である．主訴は嗄声が2例，咳嗽・喀痰が4例，胸部X線写真異常陰影が3例であった．症例の組織亜型は8例が中間細胞型であり，すべて上皮内に浸潤を認めた．また腫瘤の周囲の気管支壁は発赤，腫脹しており周囲への浸潤の所見と思われた．

18．肺小細胞癌5年以上生存3例の臨床的検討

熊本地域医療センター呼吸器内科　　中村博幸，柏原光介
深井祐治，千場　博
同　放射線科　　吉岡仙弥
同　病理　　蔵野良一

1．1981年当センター開設以来の肺小細胞癌症例101例について検討し，5年以上生存例3例(5年生存率約15%)を経験した．

2．2例は化学療法と手術療法及び放射線療法により disease free でそれぞれ約10年，5年生存中である．1例は数回に及ぶ再発を繰り返すも，そのつど CR となり約5年6ヵ月生存中である．

NII-Electronic Library Service